

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	第三回征清軍戦勝祝賀式に於ける中川學校長の奉賀文
Author(s)	中川, 元
Citation	龍南會雜誌, 34: 1 - 4
Issue date	1895-03-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4528">http://hdl.handle.net/2298/4528</a>
Right	

# 龍南會雜誌第叁拾四號

## 第三回征清軍戰勝祝賀式に於ける

### 中川學校長の奉賀文

臣元等、職員一同、茲に本校の生徒を率ゐて、

大元帥陛下の御眞影に對え奉り、謹て征清軍第三回の大捷を言壽奉ると申す。

臣元等、本日我が皇御國の

大皇祖の御位より即かせ給ひし紀元の大佳辰にあたりて、この振古未嘗有の大捷を

祝ひ奉る盛運に遭ふことを得たる、何の幸福かは之より若くへき。

伏して惟ふに、畏くも

大元帥陛下の大御施を藝城に進め給ひて、遠く滿清の大敵を討平給はんと、皇軍を

差遣し給ひしより、既茲に一周の星霜をは閱ぬ。夫れ支那兩京十八省、方六十萬餘里

廣大邊ありといへども、其の沃野千里、歷帝起伏の地は、全く西南部にあらずして、東

北部にあり、東北部の地たる、山河襟帶、その國に甲たりといへども、大都巨邑、百貨委

輸の地は、即ち盛京山東の二省にあり、而して直に京師直隸と、其の盛を抗するに足

る。故<sup>ゆゑ</sup>是を以て、盛京には、旅順口を設け、山東には威海衛を置き、以て内は京師直隸を守り、外は海外萬國を制しける、誠に是れ支那帝國の一大咽喉にして、四百餘州の命脈の繋<sup>つな</sup>ぐ處あれば、さすがにも、一國の精銳を茲に集め、巨艦を浮べ、堅壘を築き、以て多年傲然とまて、宇内に雄視せしも、亦宜にぞありける。

然るも、我が

大元師陛下の神武威靈の及ぶ處、早く既に北門の旅順口を陥れ、今や又東門の威海衛を略せりとの電報到りぬ。且、定遠鎮遠等の軍艦は、世界有數の峨艦巨舶にして、是ぞ支那帝國の大手足とも憑<sup>たの</sup>みし者なりけるも、一朝にして、脆<sup>もろ</sup>くも海底に撃ち沈められ、その両手兩足を打ち斷たれたる、今より、はた何を以てか其の頭首を擗<sup>ふせ</sup>がんとすらん。哀れ、敵の事ながら、あさましき有様とはありぬ。

夫れ旅順口、威海衛の兩關、既に我が有に歸しつれば、山東盛京、凡て支那の東北部は、即て我が大日本帝國の新領地たりとも言ふべからん。かの西南部の如きに至りては、なべて邪沴の區、瘴癘の郷、何とかまた齒牙にかくるに足らん。思ひて此に至れば、支那帝國の運命も、今日限りにして、觀を昇きて降り、貢を修めて臣たらんも、蓋亦遠きにあらざるへし。

抑も回顧すれば、我が第二軍の榮城灣に登りける、僅に浹旬の前にあり。然るに、忽ち

百尺の丹崖をも突崩し、海岸の砲臺をも打摧き、鐵馬高く嘶き、兵氣日に騰り、山には黃龍を飛し、海には朱濶を翻へし、その鯨波の轟き渡る、羽檄の飛ひ到る、歡雷よも響き、旌雲うらに連ある、誠にその盛なる、千載の一時ともいひつへし。

嗟乎、靈威を承けて、外國を降し、流沙を涉りて、四夷服すとは、是れ漢武の帝業を賛せし辭にして、將又支那古來の套語なり。然りと雖ども、彼れ古より今に至るまで、この壯語ありて、この臣民なぞ。我れこの壯語なくして、この臣民あり。この臣民を統率して、以て斯に一國の武威を宣揚し給へる、言ふも畏き御事をがら、二千五百餘年を経て、乃ち天つ日嗣を恢弘し、海の内外に光宅し、以て遺訓に答へ、大孝を申べ給ふ、その神武の灼焉ある、

大皇祖の靈も、天の磐座を押開きて、みろかはし給ひ、いろばかりか慕し給ひ悦しみ給ふらんと推し奉らる、況て、この紀元の悠久あるを祝ひ奉るにあたりて、更にこの天威の光被するを仰き奉れば、すゝろに神靈の降鑒、赫耀として頭上に照りましますばかりにあむ覺ゆる、我等臣民たる者は、いざ何を以てかこの昭代の恩顧に報い奉るへき、

唯上下一心、聖意を奉體し、海に航し、山に梯し、青雲の向伏す極み、白雲の棚引く限り、楫を干さず、蹄を留めず、進みに進みて、歐亞の大陸に立ち、世界の強國に接り、競争

の活劇を演じ、百年の富強を圖り、以て我が

大元帥陛下の千秋萬歳の壽を奉<sup>さ</sup>げ、以て神恩聖澤の万一に報い奉らんこと、返すく

も、我等臣民たる、四千餘万人の任務にして、亦是れ我か皇御國の

大皇祖<sup>おや</sup>の靈<sup>みたま</sup>に對し奉るべき大義なりとこそ信すへけれ。臣元等、職員生徒、頓首再拜

して、玆に大捷を賀<sup>は</sup>ぎ、謹て微衷を述へ奉ると申す。

明治二十八年二月十一日

第五高等學校長正六位勳六等 中 川 元